

中国人日本語学習者による有対自他動詞の習得過程の研究

ひとつの形が自動詞にも他動詞にも使える動詞が多い中国語と英語に比べると、同じ語幹を共有し、形態的に対応する自他動詞の存在は日本語のひとつの重要な特徴であることは多くの研究で指摘されている。(寺村 1982, 須賀, 早津 1996, 影山 1996, 2001) そのような対のある自他動詞の使い分けは中国語あるいは英語を母語とする学習者にとって難しいと予想される。これまでの研究では、記述的文法研究によって予測された研究が大半を占めており、学習者言語の解明を目指す習得面からアプローチした研究はまだ少ない。本発表は中国人日本語学習者を対象とし、文完成法タスクを行い、英語母語話者との比較を通して有対自他動詞の使用上の特徴を解明することを目的とする。

先行研究では、学習者の自他動詞の使用に関して、他動詞の過剰使用から自動詞の使用へと推移し、使い分けが行われるようになると指摘されている(守屋 1994, 小林 1996, Morita 2004)。しかし、中石(2003)によると、他動詞だから早くから使用される、自動詞だから遅くまで使用されない、という文法的な動詞のカテゴリーが直接に使用されやすさに関わるのではなく、語によって使用の推移も異なる可能性が示された。そこで本研究では、奥津(1969)、須賀, 早津(1995)、小柳(2008)などの先行研究に基づき、有対自他動詞を「自動化」「他動化」「両極化」の3種類、15タイプの下位派生に分けて考察していく。先行研究における Makiko(2004)の英語母語話者に対する習得研究と比較するため、本研究では「学習歴」と「動詞の派生タイプ」という二つの要因を設定し、有対自他動詞に関する「文完成法タスク」を用い、中国の済南大学で習得実験を行った。

一般線形モデル(GLM)で分析した結果、「他動化」と「自動化」、「他動化」と「両極化」の間に、0.1%の水準で有意差が見られたが、「自動化」と「両極化」の間には有意差は見られなかった。「両極化」動詞の習得はより早い時期で安定し、正答率がほかの二つのタイプより高く、「他動化」動詞の習得は激しく変動し、正答率がより低いということが明らかになった。また、低年次の場合は、「他動化」の正答率が低く、学習が進むにつれて正答率ははるかに向上した。「自動化」の正答率は3年生まで穏やかに向上し、4年生になるとほぼ正しく使えるようになった。そこで、派生タイプにより有対自他動詞の習得順序は大体「両極化」→「自動化」→「他動化」であることが分かった。

また、学習歴による考察の結果、本研究では学習歴が長いと有対自他動詞の習得が良いことが示された。Morita(2004)で得られた英語母語話者の結果と比較すると、「U字型発達曲線」に従わなかったことが明らかになった。なお、低年次のとき、3つの派生タイプの習得に大きな差が見られ、「他動化」の習得が最初の段階で難しかったが、学習歴が長くなるにつれて、有意差が少なくなり、高年次になると「他動化」の習得がはるかに向上したことがわかった。

参考文献の一部

須賀一好, 早津恵美子編(1995).『動詞の自他』日本語研究資料集 第1期第8巻 ひつじ書房

小柳昇(2008).「自他動詞の派生対立の分類再考—自動詞と他動詞の両方に現れる「-er-」の位置づけ—」『拓殖大学院言語教育研究』, 第8号, pp.143-158.

Makiko morita(2004).The Acquisition of Japanese Intransitive and Transitive Paired Verbs by English-Speaking Learners:Case study at the Australian National University .『世界の日本語教育』14,pp.167-192